

中村要君かなめの死

山本一清

前後十二年間、天文研究の私の伴侶として、昼となく夜となく、公私の生活を共にした中村要君が、急に亡くなったのは一九三二年九月二四日の早朝である。この日は今後永く自分にも思い出の日となるであろう。中村君の二九年の生涯は、短かいものであった。しかし、学界のために、社会のために、また、家庭のためになしとげた貢献は実に大きい。この短かい年月の間にも、普通の人の二、三人ぶんの大事業を敢行したのであつて、質にも、量にも、実に偉大なる人物であつた。ことに、直ぐ今後のさらに大きい功績を予想するとき、いくら惜しんでも惜しみ切れない。

中村君の死は、世の多くの人には、永久の謎として、解けないままに、残るであろう。自分も（毎日毎夜、生活を共にしたこの自分自身も）今にして思えば、中村君の心境を、余り知らなさ過ぎた。実に慙愧ざんきに堪えない気がする。——もつとも、世間の人々の中では、かねてから、自分がやはり最も多く中村君の私事を知っていたので、現に彼が急死するより十日ばかり以前の九月十二日の午後、花山で久しぶりに会った時などは、彼の顔色のいよいよただ童たならぬようすを見るに見かねて、「君！ 君が郷里へ帰って静養するのは、全く駄目だよ！ 少し乱暴だが、ウンと思ひ切つて、半年ばかり、遠くへ去つて、行方を晦くらました方が好い！」

と、自分は、かなりマジメに薦めたのであったが、人一倍親孝行の彼は、この乱暴な忠告を、直ぐきこうとはせず、ただ、にが笑いをしていた。これが縁浅からぬ彼と私との永久の別れとなつてしまつたのであった。中村君が「夜に眠られない」「眼が悪く（乱視に）なつた」「神経衰弱になつた」といい出したのは前年の暮れ頃からであつた。自分はこうした訴えを聴くと責任を常に痛感した。そして、なるべく外界からの妨害を、その日常生活になくさせるため、自分もいろいろと苦心した。そのためには、天文台本館の内外に多少の営繕工事を施したり、また、宿舍の模様変えなども行つた。そして、「観測者を優遇しなければならぬ」ことに極力注意した。——しかし、今にして思えば、こうした自分等の心使いは、中村君の病症を治すべく、ホンの末梢的の効果をあげ得るに過ぎなかつた。病症の大きな原因は、別に存在したのであつた。顧みれば、私も、人生の大きな学問をさせられたのであつた。

中村要君は明治三七年（一九〇四年）四月八日、滋賀県滋賀郡真野村の中村与氏の次男として生れた。幼時や少年時代がいかであつたか、自分はよくは知らないが、いろいろなことにまめまめしく没頭研究する癖がすでに早くから芽生えていたという。生家は、十幾代も前から、村での名望家で、近年までは、年々三百余俵の年貢米を収め、厳父は村の村長その他の名誉職にも幾度かあげられ、交際も広く、一般の尊敬を受けていた。要君は一人の兄と、二人の弟と、二人の妹とをもち、総計六人兄弟の第二子であつた。かのハレー彗星の現われた一九一〇年（明治四三年）の四月に生地真野村の小学校に入り、大正六年（一九一六年）の春同校を卒業して、直ぐ、京都の同志社中学に入った。中学時代にも特筆すべきことは知られていない。ただ別稿に残されている「寮生活」は、同志社時代の寄宿寮の生活の一斑を偲しのばしむるに足る。

要君が何時頃から天文に興味を覚えるようになったかは、やはり、明らかでない。ただ、この点に関する最

初の消息は、大正八年の頃、要君が京都の帝国大学に近い百万遍あたりに下宿していて、大学天文台あてに二つ三つ天文上の質問事項をハガキで聞き合わせに寄越し、それに対して、百済くだら〔教獣〕理学士その他の人々が返事を出したぐらいのことが記憶されているに止まる。

大正九年に天文同好会〔東亜天文学会〕が創立され、まもなく、海老恒治氏等の熱心によって、同志社の中に支部が設けられたときから、私はこの支部の例会に度々出席したが、要君はこの同志社支部例会に集まる常連の一人であった。

要君は大正十年の春に同志社中学を卒業した。それから「高等学校の入学試験を受けるのです」といったが、実は余り天文学にみが入り過ぎて、他の学科などを勉強する気にならなかつたらしいことが、誰の目にも見えた。入学試験には不合格となった。しかし同君はそれをほとんど何んとも思っていなかつた。それから、まもなく、いよいよ本格的に天文家の生活に入る覚悟をきめ、熱心な希望によって、京都帝国大学の天文台へ、志願助手として入ることが許された。そして、短かい袴はかまをはきながら、昼となく夜となく、天体の観測と、図書の閲読とに精進することとなった。

大学の職員になつた最初は、口径五センチ級の小さい望遠鏡を使って、変「光」星の観測をやつたり、あるいは流星を観測したりする以外には、ただ何となく、手当り次第に書物や新着雑誌を読んだり、かのハイデ製の一〇センチ赤道儀で、普通の常識的に有名な天界の珍景を楽しんでいたようである。

その頃の要君は、いわば今日の中学生にもよくある程度の「星のファン」であつて、至極ノンキに、世の中の気苦労がないだけに、はなはだ愉快げに、満足げに、その日その日を暮していたが、「果してこの男が、将来何になるのやら」全く予想するほどの何ものも認め得ないようすに見えていた。ただ、しかし、その当

時から、一つ特筆されるべきことは、要君の眼の視力が非常に鋭いということであって、(多少、色盲の傾向があることも、当時すでに知られていたが)、プレヤデスの中に、星が十二、三見えませす”などといい出し、われわれを驚かせたこともある。

中村要君が学術上の最初の業績をあげたのは、かの一九二二年六月下旬におけるウインネツケ彗星に関連する流星群の観測であった。この流星群は、一九一六年の時、外国でかなり著しいものが見えた歴史があるので、一九二一年にも何等かのものが見えるだろうと一般に待望せられていた。要君は六月二五日から自分と共に近畿の各地を旅しながら、首尾よくこの流星を発見し、八月初めの頃までも見事にそれを追跡したのであった。この流星は多く微光星であったため、学界に多少の批評を生んだこともあったけれど、要君の観測はその後毎年行われて、最近一九三〇年までも及び、殊に一九二七年に同彗星が再帰した節などは、米国やロシア方面の観測者たちもその種の流星を認めたので、要君の観測結果をますます価値付けることとなった。微光流星については、なおこのウインネツケ彗星関係のものほかに、一九二八年六月上旬のシェレルプ彗星に関連するものや、一九三〇年五月末のシュワスマン・ワハマン彗星の関係のものなども、要君はいつも熟練と熱心とによって成功を収め、世界の同業者たちを驚かせているばかりでなく、国内における若干の微光流星観測者を指導督励した功績は、永く記憶さるべきものである。

諏訪の三沢(勝衛)氏と比べて、(果して何れが早かったか明らかに知り難いが)、中村要君は一九二〇年頃から小形の望遠鏡で太陽黒点を連日観測したものである。ある場合には、例の鋭い肉眼で、主な黒点だけの記録をとったこともあった。この種の観測は、三沢氏のように永く継続して行わなかったけれど、観測の方法や態度や、その時々々の成績など、非常に優れたものであって、これがまた、その後、同君の太陽観測上の

貴重な指導的経験となったのである。

要君は、大学にきて、ハイデの赤道儀やブラッシャーの反射鏡を使用するようになってから、月や、木星や、火星など、遊星表面の観察を始めた。これはわが国の天文学界において、全くの最初であり、また、ほとんど独特の研究方面であつて、それだけ苦心も払われたわけであるが、実にスバラシイ成績をあげたものである。

月や木星は、しかし、観測上の経験を獲たという程度に、要君自身は止まっていたらしいが、火星面の観察は、一九二二年の頃から、W・H・ピッカリング教授の主宰する「火星観察者連盟」に加入して大いに活躍し、ほぼ二年おきに火星が接近する毎に、必ず何等かの貴重な貢献を連盟のために齎した。連盟の機関誌であるPopular Astronomyを読んで見ると、欧米の人々に伍して、「火星報告」の連載されている中に、要君の名とそのスケッチとが夥しく見付けられる。要君が亡くなった今日、思うに、こうした美しい火星面スケッチが日本人の手でまた世界に発表せられるのは、果して何時であろうか？ 感慨に堪えない。

もつとも、要君は遊星面観測については、早い頃からかなりよい友人をもっていた。それはすなわち神戸のアマチア天文家R・スコフィールド氏で、中口径の反射鏡を使用しつつ、火星や木星の表面を興味深く観察する人であつた。同氏もかなりの技術をもつていて、ほとんど要君と同じ程度の腕前を振ったことも一再ではない。要君とス氏とは、同じ興味で互いに励まし合いつつ、一時は兄弟のように親しく交わり、共にその成績をもつて、ピッカリング教授を喜ばしたが、何としても、ス氏はアマチュアの身分として、平生多忙な俗事に日を送る人であるため、観測は時々中止され、結局、気の向く時にのみ行われるのであつたが、要君の方は、とにかく専門的に全時間を天体観察に費し得る立場にあつたので、準備や基礎研究もよく行き届き、従つて、真に権威ある観測者としての成績をあげ得たのであつた。年月の進むと共に、要君の火星研究は全

く深い自信の上に築き上げられるものとなり、最後の日の遺書の中にも、顧みて火星のことを書き記したほどである。ただ誠に残念なことは、一九三三年の春に接近してくる火星を、要君は観測することを、かねてから熱烈に希望しつつあったにかかわらず、それを遂げなかつたことである。もしその一九三三年度の火星の観察さえ行われれば、一九二〇年、一九二二年、一九二四年、一九二六年、一九二八年、一九三一年、及び一九三三年の、前後七期を通じて、火星面のあらゆるシーズンの模様の観測が完成し成就するはずであつたのであつて、要君自身も、最後の日の、最もいたましい心残りはこのことであつただろうと思われるし、また、われわれとしても、ぜひこの火星観測を一応完成させたかつたと、残念に思う。

中村要君の残した業績の一部に、変〔光〕星の観測や発見がある。これはよほど以前から着手したものであつて、比較的に小形の望遠鏡でもなし得る仕事であるし、また他の仕事の合い間合い間にも簡単にできるたちのものであるから、思うに、最近までのものを合算すると、結局、幾千とか、或は幾万とかいう夥おほしい観測結果を残しているのではないかと想像される。もつともこのうち幾パーセントはついにハーバード天文台ブレテン等を通じて発表されているが、しかし、なお大部分は未発表である。今後、われわれの手でこれらができるだけ精細に整理し、適当な形式をもつて、学界に送りたいと思う。新しい変〔光〕星の発見も幾つかはあるはずであるが、精しくは今直ぐにはわかりかねる。

要君がスコフィールド氏と交際することによつて新しい興味をそそられたと思われれることの一つは、太陽のプロミネンスを眼視的に観測することであつた。ス氏は一九二二年の頃、ついにこの種の希望をもち、自分の所へも種々器械の構造につき問い合わせにこられたことがあつたので、自然、要君にも同じような相談があつたことと思われる。これが一九二五年頃には具体化して、ス氏は暫しばらくその観測結果を天文同好会に報

告され、ブレテンを賑わした。要君もまたこのプロミネンス観測をぜひやって見たいと常々いつていたけれど、当時までは京都に適当な分光器がなくて、仕方がない次第であった。ところが、一九二六年の頃に、自分は英国のアダム・ヒルガー会社に交渉して、プロミネンス観測用のスペクトロスコープを、公用と私用と都合二個買入れたので、要君も大変に喜び、早速これを望遠鏡にとり付けて、観測を連続に行い、なおこの種のスペクトロスコープを使用するのに最も適当な望遠鏡の種類や構造等も、要君は特別に研究した。スマトラの日蝕（一九一九年）にも要君はこのスペクトロスコープをもって行くことを忘れず、あちらで、やはり太陽をながめて、いよいよ日蝕の日など、蝕の起らない以前から、プロミネンスの形について、予備的な知識をもっていたほど、行き届いたものであった。

彗星の観測は、自分等も以前から特別な関心をもっていたものであり、要君が大学へくる以前から、故佐々木哲夫君が一九一九d彗星を発見するやら、百済理学士が一九二〇ab彗星を発見されるやらで、わが京都帝大天文台は彗星の出現と結ぶ縁故はかなり深かった。したがって、中村要君としても、やはり、彗星には特殊な興味をもち、都合のよい彗星が現われれば、必ず、それを観望ないし観測することにしていった。彗星の日々の経緯度を測定し始めたのは、花山天文台ができてからであるが、その以前から、彗星の光度や、形状、望遠鏡による観測能率等には、年々の実地的な経験をよほど積んでいた。これは、花山へ移ってからの研究の進行上に非常に役に立った。

一九二二年一月、要君は小犬星座のあたりで、待望されているペライン彗星を捜索中、ほぼ予想の位置に、それらしい星像を認め、なおそれが予想の如く運動することさえ認めたらしいので、早速これは新城（新蔵）主任教授から東京天文台へ知らされ、東京からはまた、世界の天文電報中央局であるユクル天文台へ知らさ

れたものだから、この発見報は比較的早く全世界に広まった。自分は当時米国ヤーキース天文台にいて、この電報を見、大いに喜んだものである。そして、ヤーキース天文台で自分が使用していたブルース望遠鏡をもつて、連夜、この中村彗星の搜索のための写真撮影を行った。ところが、甚だ残念にも、彗星は写真板上に現われず、また、他の天文台でもこの彗星の正体を認め得ず、結局、学界に多少の失望を与えた結果に終わった。要君がこの年一月三〇日から二月二日まで、三夜連続観測した「彗星」は、光度が一三等級であつて、この点からいっても、鋭眼の同君以外にはほとんど見えない程度であつたとともに、各地の天文台で強力な望遠鏡写真にも認められなかつたものだから、一時、いろいろの説が行われ、「他にも例がある通り、何かの都合で、急に光輝が衰えたのだろうか」というのであり、あるいはまた、「始めから一種の錯覚でなかつたのか？」とさえいう人もあつた。しかし、けつきよく、これ以上に積極的な材料は獲られなかつた。

要君が発見した彗星の今一つは、一九三〇年の十一月中旬にh彗星というのを口径一一センチのカメラで撮影したことであつた。この星はその後、約二週間のうちの一〇枚ばかりの写真に微光の影像を現わし、その位置の測定値から軌道要素の算出にまで進む順序をとつた。一九二二年のこともあるので、こんどは自分達もよほど大事をとり、軌道の形がほぼ知れてから、その要素や推算位置等を含んだ発見電報を、一月二〇日頃、コペンハーゲン中央局へ送つた。これが後から思えば、少々念が入り過ぎていて、また好機を逸したことになつてしまつた。何となれば、この発見電報を諸外国の天文台が受取つた頃には、彗星の光りがすでに微弱となつてしまつたか、とにかくまた誰もほかにこれを観測し得なかつた。そこで、要君は再び非常な責任を感じ、ウンと精力を注いで、徹底的にこの問題を研究する段取りを決め、彗星像の現われている写真原板の測定を幾度もやり直し、また、それから、軌道計算の原理や方法そのものを研究しつつ、幾度も計

算をくり返し、ついに前後約九カ月を費して、一九三二年八月に、研究全部をきれいにまとめ、花山ブレテン第二一一号に発表した。これにより、学界の謎も一まず解決し、一九三二年度の英国ロイアル天文学会月報には、クロムメリン氏がこの中村彗星一九三〇gを正式に原簿へ登録したと発表した。永く要君の精力を傾倒せしめた難物ではあったが、この彗星の研究によつて、要君ははからずも、彗星の写真像に関し、また、軌道計算に関し、研究上の深い経験を獲得したのであつて、彗星そのものを獲た以外に、副産物もかなり多かつたわけである。

こうした難物の一つ二つを外にして、要君が観測した彗星は夥おびただしいものである。観測は始め写真術の応用として行われたが、一九三〇年の末からは、クック赤道儀による測微尺観測を遂行し、時間と努力との点において、甚だ能率をあげた。

赤道儀の測微尺による天体観測も、わが日本の天文界においては余り例のない方面である。測微尺は京都にも東京にもかなり早くから備えているけれど、ほとんどの種の観測は、誰も未だ手を付けないものであつた。この方面にも要君は敢然としてスタートを切つたのであつて、これがためには、すでに幾年も前から、器械の構造や、測定の理論や、計算の方法等につき、深い準備研究を積んでいた。

中村要君が自分あての遺書中にも記している天文業績の一つに、小遊星の観測や発見のことがある。要君が小形カメラにより小遊星の写真撮影をやり出したのは、遅くとも一九二八年の頃、すなわち、花山が未だでき上らない前からであるが、花山に諸器械が移つてからは、一層この方面に奮ふんれい励した。その大体は、花山のブレテンを見て貰えば一目瞭然である。ことに一九三〇年八月、口径一一センチの三重玉レンズができてからは、ブレテンのほとんど毎号に、中村君の署名ある小遊星の観測報告が載ることとなつた。これらの報告は、

多く、花山ブレテンに発表されると同時に、ドイツのベルリン天文計算局に送られ、同局出版のブレテンにも
 のって、その紙面を賑わし、わが日本よりのただ一人として活躍した。この小遊星の写真撮影観測中、要君
 は前後九回にわたり新天体を発見した。これは同君が勤勉の当然の結果であつて、甚だ慶賀のいたりである。

順番	番号	仮名	発見年月日	備考
1	—	Kyo	1928年 8月27日	1928 QM
2	—	kwasan	1930年 9月19日	1930 SR [Comas Sola, 9月30日]
3	—	Kwasan	// 9月18日	1930 SB
4	—	Kwasan	// 9月19日	1930 SS
5	—	Kwasan	// 8月17日	1930 QS
6	(245)	Kwasan	1931年 6月8日	—
7	—	Kwasan	// 6月8日	—
8	(1214)	Kwasan	1932年 1月6日	1932 AA [Max Wolf, 1月1日]
9	—	Kwasan	// 3月2日	1932 DB [Schwassman, 2月28日]

右表の小遊星はみな写真によつて中村要君が発見した新天体である。しかし、そのうちの若干のものは、後
 になつて、軌道計算の結果、既知の天体であつたことが知れたり、また、わずかに数日の差で欧米の観測者
 に発見の先鞭を付けられたりしたものもあるのであるが、それでもなお残りのある天体は、けつきよく中村
 君だけが唯一真実の発見者であつたことが立証されて、確定的な番号も与えられ、命名権も与えられる日
 くることと予想される。

一九三〇年末から一九三一年初めへかけて、世界人一般の注意をひいた小遊星エロスは、やはり、中村要君

が熱心に観測した一人である。早くも一九三〇年の十月に同君はエロスの写真像を認め、その後、光輝変動や、星像の特異性にも注意を怠らず、ついに一九三一年一月中旬に至つて、「エロスの形状が恒星状でなくてむしろ連星状である」ことを発見し、同年二月には自転する事実までも確認した功績は、さすが鋭眼を武器として多年戦い抜いた技術の賜であると感心させられる次第であるが、しかし、要君として見れば、これらの成績はむしろ副産物であつて、彼が始めからエロスのために計画していたプログラムは、全世界の多くの赤道儀観測者に伍して、太陽視差の研究資料を獲るため、この星の精密位置を測微尺によつて測る大事業であつた。この結果は、まだ未整理のままであるが、近いうちにこれは、整理されて、発表されるはずである。

一九二九年五月九日の皆既日蝕観測のため、自分等と共に、京都帝国大学天文部からの派遣隊に加わつてはるばるスマトラ島まで出かけたことは、中村要君の短かい一生を通じて、かなり特筆すべき事件であつたことはいうまでもない。このスマトラ遠征は、実質において、要君と自分とが計画の全部を行ったものであつて、殊に同君は観測用の諸器械の製作や設計から、往復の大貨物の荷ごしらえはいうに及ばず、観測のプログラムまでも、立ち入つて働き尽し、また、観測の結果においても、最も優秀な成績をあげた偉勲者であつた。もし同君がいなかつたならば、大小二台のコロナグラフに使用されたレンズ等はいうに及ばず、写真乾板の撰択等においても非常な不便を経験しなければならなかつたことと思われる。実に、遠征の始めから終りまで、重要な人物の一人であつた。

前後十数年間の天文生活中に、中村要君は実に多方面の経験をしたものであるが、写真に関する一切の技術も、また、そのうちの重要な一つであつた。レンズの知識はいうに及ばず、諸種の乾板について、また、それらの暗室内における処理について、年とともにその技能を磨き上げ、最近年は、真に玄人らしい写真エキ

スパートとして、実に何所どこに押し出ししても恥かしくない腕と自信をもっていた。前記した諸方面の天体観測——例えば、月や、彗星や、小遊星や、日蝕等、そのほか、星霧〔星雲〕や、諸種の星野写真など——みなこれらが優れた成績を獲たのは、同君の写真的技術が優れていたことに帰するのである。

最後に、中村要君の遺した最大の功績は、何といつても、かの誇らしい光学品の製作と、それに関連する諸器械の設計や研究であった。ほんとうに、生れつきの天文家らしくスクスクと延びてきた要君は、技術者として、やはり、何のどよみや、無理もなく、全く自然に成長してきた人であった。同君は中学の最上級の時すでに「一インチ望遠鏡」というものを自作して、何等かの実用にも供し、それを無心にエンジョイしつつ友人にも薦めていた。大学に入ってから、オートエイ製の五センチ・ファインダー、ハイデ製の一〇センチ赤道儀、ブラッシャー製の二五センチ反射鏡、ザートリビウス製の一八センチ赤道儀などという順に、大学所有の大小望遠鏡をほとんどマスターすることに専心し、ついにはカルバン作の三三センチや、同三三センチの反射鏡や、同じ四六センチの望遠鏡、さらにまた、クック製の三〇センチ大赤道儀にいたるまで、あらゆる天文器械に通りの——否一通り以上の深い研究と経験を積んだのであって、これらの豊富な知識と興味が、一九二五年頃から、一転して、光学品の自作へと向って発展したのは、誠に自然な展開であったといふべきである。一九二五年の何月何日頃であったか、はげしい労働の兵役生活から大学へ帰ってきて未だいくらないと思っていた頃のある日、自分は、要君から、

“先生、反射鏡を一つ磨き上げました。見て下さい”といわれ、驚異と喜悦とに満ちて、汚い工作場の一隅へ案内されたことを自分は今もなお覚えている。それから、全くのトントン拍子に、作られる鏡面の数も増し、試験や整形の技術も、目に見えて進んだ。そして、一九二八年頃からは、手磨きでなしに、簡単な

自作器械で、器械的に鏡面を研磨することにもなり、仕事の進みは一層速やかだった。また、一九二九年から、対物レンズの設計や製作にも成功し、それも、間もなく、改発氏のための一五センチ玉や、自用のための一センチ三重玉の如く、優れたものが、「何時の間にかでき上る」というほど易々^{やすやす}として生産された。最近には、改発氏のために口径二センチの写真玉を磨き終り、大きい責任を果たすと、喜んでいる有様を見たのが一九三二年の初夏の頃であったが、一方において、天文台用のため、口径二センチという大形の写真玉を作るべく、すでに、一九三〇年末頃から、苦心設計しているようすが伺われた。ただし、この二センチ玉は、最近、病勢の募るのを見て、一時中止するの止むなきにいたったがとにかく、一体に著しい技術の進展には、誰も驚かされた。要君が死した今、その机上に残された光学品研磨ノート約一〇冊は、前後七八年に渡るこれらの作業とその成績に関する一切の覚え書きとしておかれてある。これを見ると、同君が自作の光学品は、

パラボラ鏡が総計	約三〇〇面
平面鏡	一〇面
対物レンズ	四〇組

であつて、前後七年間の成績として、いかにも多量であることに驚かされる。

こうした光学品の製作ばかりでなく、要君は、数年にわたつて、大小種々の望遠鏡を設計した。始めは普通の経緯式反射鏡から、漸次特種な極軸望遠鏡や、彗星搜索機や、写真専用の赤道儀にまで及び、大きさも、口径二五センチ反射鏡や、一五センチの眼視望遠鏡にいたるまでに進んだ。こんなわけで、自分などは人々に「もはや、わが日本にも中口径の望遠鏡は立派にできるようになった」と話し得るにいたつたのである。

中村君が天文界に入ってから前後十幾年、上に記したような多方面の研究や観測に、百パーセント充実した学生生活をやって、しかもその成績においては、普通の人の、一人前や三人前の仕事をしたのであった、と同時に、同君の仕事の中には、日本の天文学界において全くの新分野であるものが少なくないことは驚嘆すべきである。例えば、火星面の観察や、天体写真術の研究や、天文望遠鏡の構造に関する種々な研究など、それに、微光流星と呼ばれる新種の天体の認識など、皆、同君の貢献は大なるものである。それから、分野は必ずしも、新分野でなくても、同君の勤勉によって、量的に大量収獲を得たのは、例えば、変「光」星や、小遊星や、普通の流星など、これらは何れも今までに発表されたものは少なく、未整理未発表の部分が非常にたくさん残されてある。前にも記した通り、これは今後、ぜひ整理したいと思う。この整理が完成して発表されれば、同君の学的価値は、今までに数倍するものとなることであろう。

中村君は、腕の人であると同時に、熱の人であり、また、徳の人でもあった。誰でも、三〇才に満たないこの一青年学徒に会って、親しみとなつかしみを永くもたない人はなかったであろう。体軀は堂々として、すもうとりのように”巨大でありながら、心は誠にやさしく、デリケートな感情の持ち主であった。これらの”人間としての中村君”については、多くの友人たちの追悼文によって充分に窺われると思う。

友として、自分は永く交った。そして今は、もはや、肉親にも等しい近しきを感じていた。ただ、しかし、要君はどうした運命の悪戯か、世にも珍らしい家庭上の悩みを負い、それを、私にはいうまでもなく、他のいかなる人にも絶対にいわないで、どこまでも悩み続けたのであった。自分も、かねてからそれと察していたので、なるべくは、その悩みを共に負担する覚悟で、話の糸口を求めたこともあったが、堅く決心したらしい同君は、最後の日まで悩みを秘して、そのまま永久の旅に立つてしまった。

要君の死因は、いろいろな立場の人々から、いろいろに考えられるだけで、果して、神経衰弱か、眼の廢疾か、家庭の悩みか、自己の行きづまりか、その他なお我等の思い及ぼない種々のものがあつたのかも知れない。自分には、すでに夏の頃から、要君の身边にはある重大な事件が起ることが予感されたのであつた。〔二九三年〕九月二四日の午後、自分は長野県の出張先きで、要君の急死を報ずる二通の電報を京都から受けたのであつたが、それを見て直ちに思ったことは、「いよいよ、やったか」ということであつた。決して単なる驚きではなかつた。要君に最後の決心をさせた直接原因は、九月一八日、要君の実の祖母が死去されたことであつたと思われる。長野県から急ぎ歸洛した自分の宅へ、次ぎのような一枚のハガキがきていた。これは、要君から自分に送られた最後の便りである。日付は二四日であるが、実は少しく以前に遡るのではあるまいか？かなりの落ち付きある文ではある。

拜啓

小生祖母十八日夜半近く死去致し、小生療養上甚だ災されました。大学の方でおかまい下さらぬ様、御願申上ます。

七、九、二四（スタンプの日付）

山本一清様

真野 中村要

中村要君が、いよいよ時の迫る九月二四日の早暁を知りつつ、自分へあてて書いたと思われる遺書の一部は下の如くである。

山本一清先生

小生が長い間自分で不眠症で今に直る位に思つて御知らせせず数カ月も経て自分の始末のつかぬよう

にしてから申し上げたことが全く失礼でしたし間違つております。自分では兄の死後余りに大きな負担を与えられ敢然と戦つてきましたが遂に自らの体を害し自分では急に直らない病気の為めに凡ゆる方面、勿論直るまで待つても良い様なものの其れは自分の事情として全く許されない事なのです。詳しい事情は申しても私事でありますから、止めておきたいと思ひます。小生は外観上余り変らないので簡単な症状のように考えておいでだったかも知れませんが、左様ではなかつたのです。小生が今回の方法をとる以外自分の立場が無い様に思われます。氣の小さい事は確かですが仕様がなないので。余りに貧弱な○です。

全く長い間御導き下さいました事を厚く厚く謝します。小生の研究室の物品は何んか研究のために公開し、反射鏡その他の製作品は研究に御使用下さい。

(中略)

自分のやった仕事では、光学方面のものが最も大きいでしょう。これは四五冊のノートに鏡の事が記してあります。OGもその一つです。全く大きい仕事ですが、全く仕事をマスターしてから、体の点に失敗に終わりました。次の天文の仕事で小遊星の方です。マースも一つです。(下略)

書きたいことはいくらでもあるが、いろいろと、過去のことを思いめぐらすと、私は胸がせまって、筆がほとんど進まない。若くして学に志ざし、奮励力行して十年ならざるうちについて学界の頂点にまで近づいた彼、いよいよこれからの生涯の最も花々しい時代を迎えて、如何ほどの成果をあげ、世界文化の進展のため如何に大きい貢献をするであろうかと、知る者皆が期待していた彼の俊才の花々しい生活の半面に実に稀代の悪運命が待ちかまえて、強健と見えた彼の心身も、ついにはこれに堪えざらしめ、無惨にも倒れたこ

とを思うと、悲哀を通り超えて、われわれの心は寧ろ憤激むじの情に燃ゆるを覚える。

(一九三二—二二—二)

- 『四十八人の天文学家』（一九五九年六月号、恒星社厚生閣）所収。
- 収録にあたり旧字は新字に、旧かなは新かなに改めたが、一部の漢字は旧漢字のままにした。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- カタカナ書きの人名・地名については、通行の表記にあらためた。
- 「」は編者の註である。
- PDF化にはL^AT_EX 2_εでタイプセットを行い、dvipdfmxを使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、
「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。